

り話であらう。

洛陽本満寺に、日重と呼ぶ上人がゐた。或る時壇家へ齊に招かれて行つた。主人が、彼に盃を渡して、酒を酌いだ所、彼はそれを庭の垣の根へ捨てた。主人も洒落た男であつたと見えて、その有様を見て「垣が酒を飲まうと云ひましたか」と、問ひ掛けた。日重は「垣が敢て酒を飲まずと申しましたか」と云つて澄ましてゐた。

その次の齊の折に、今度は日重は、酒を床下へ捨てた。主人は、「欲しくなければ、受けなければ好いのに、受けた以上は捨てるとはけしからん」と詰め寄ると、日重は「いや、法界に施したのです」と答へた。

これで、主人が兜を脱いだといふのであるが、この話は蛇の目の茶碗よりは、眞實性がある。初代の都々一坊仙歌は、秋田の出身である。或る時秋田藩主佐竹侯が、彼を江戸の下屋敷に呼んで一つからかつてやらうと、三時間ばかり、彼をたゞ一人座敷に放りばなしておいた。仙歌は、退屈で堪まらないから、両手を天上に向けて、大欠伸を連發して居ると、不意に唐紙が開いて、佐竹侯が顔を出した。

「坊主、その方の大欠伸と掛けて何と解くな」

「お殿様の御國産」

「心は？」

「秋田(飽きた)から出る」

このことが、町々へ聞えて、仙歌の名は大いに擧がつた。さういふ話もある。これも一種の問答でウキツトが、秋田侯を感服させたのである。

問答は禪から出てゐるだけに、却々味なものである筈なのだけれど、寄席藝人のために、詰まらない狭い鑄型の中に、はめ込まれてしまつた。残念であるが、今となつては、既に手遅れで、何とも起死回生の道が無い。それらの鑄型問答の見本は、

問 一つのを、萬(饅)頭とはこれ如何に。

答 一枚でも千(煎)餅といふが如し。

問 一つ作つても四(詩)とはこれ如何に。

答 一度打つても五(碁)といふが如し。

問 東京に在つても京橋とはこれ如何に。

答 武藏に在つても日本橋といふが如し。

かう云つた行き方である。以下問答のいろくを並べて見やう。○印が問で△印が答である。

- 一人居ても四(土)族とは      △一人にても三(山)賊
- 一人で五(後)妻とは      △一人でも三(産)婆
- 一人でも千(先)生とは      △一人でも千(船)頭
- 一人ゐても千(仙)人とは      △一人でも十(住)人
- 一つの品を二(荷)とは      △一人うまれても三(産)
- 珍らしくも無いに珍(狎)とは △起きて居ても寝子(猫)
- 吸へないのに(鑿)とは      △木で造つても土(槌)
- 紅い肉でも眞黒(鮪)とは      △白くも無いのに(このしろ)
- 側に在つても無し(梨)とは      △買つてゐても賣り(瓜)
- 新らしくても古い(飾)とは      △古くてもさら(皿)
- 雨具でも無いに簑(美濃)とは △船具でも無いのに襪(甲斐)
- 古くても新橋とは      △架け替えても萬世橋
- 出して拂ふを入質とは      △席に入るに出席

○中央を通つても端(橋)とは      △中央に在つても隅(炭)

○著物でも無いに著せる(煙膏) △國の名に幾内(著ない)

○見て楽しむものに菊(聞く)      △飲んでもきき酒

先づざつと、かうした行き方である。大部分が語呂合せであるのは、遺憾至極であるが、それだけにコツさへ覚えれば、誰にも譯なく出来る。

問答には、この外に文字を取材としたものがある。この方は矢張り字謎の變形と見られるものが多く、中には却々うがつたものもある。青少年にやらせれば、漢字の勉強にもなるといふ餘徳があり、語呂合せとは違つて、些か學問的な興味が加はつてゐる。その一例――。

- 晒と読みさうな字を泊とは      △妹と読みさうな字を姿
- 午後と読みさうな字を晒とは      △越後と読みさうな字を雪隠
- 縫と読みさうな字を綻とは      △雀と読みさうな字を箔
- 米搗と読みさうな字を舅とは      △梯と読みさうな字を橙々
- 火の車と読みさうな字を鬼灯      △牛と読みさうな字を角力

○訪と読みさうな字を闇とは △解と読みさうな字を紛

大體右のやうなものだ。漢和字典でも引ッ繰り返せば、こんな問答はいくらでも出来るであらう。お説ご尤もといふ感じのする所に、愛嬌があるではないか。

### 文字のたはむれ

それらの問答から思ひ付いたらしい遊びに「文句直し」「文字読み込み話」「問答あそび」などがある。「文句直し」は誰でも知つてゐるやうな詩歌俳句の類を選びその中の字句の何處かを、わざと間違えて置いて、訂正させる遊びである。「文字読み込み」は、落語の三題話の簡単なやうなもので、五ツなり十ツなりの單話を示して、それらを用ひて、まとまつた話をする遊びである。「問答遊び」は、云はゞ會話の練習で、鬼になつた者を中央にして周圍の者が、鬼に向つていろくくと話し掛け、鬼はそれに向つて、一つの言葉で返事をするやり方である。

それらは、子供向きの遊びであるが、大人向きの戯れとしては「天狗俳諧」がある。その普通のや

り方は、半紙を縦に三つに折つて、その一つ宛に上五、中七、下五を書き込むやうにする。數人の者が寄つて、各々上五なり中七なり下五なりを、それく自由書き込みば好い譯で、句作者は、むろん上五を見ないで、中七を付け、次の下五を付ける者も、上の方を見ないで付けねばいけない。それがにめに、三つに折つた半紙を次に廻す場合に、自分の書いた部分は、折り込んで見えないやうにしてから、次へ渡す。次の者も同じやうにして、また次へ廻すのである。各自がてんでに勝手なことを書き込むのだから、まるで句の體をなさないこともあるが、また非常によくまとまつた、或ひはうがつた、或ひはまた頗るエロな、一つの十七字詩を得ることがある。大人の室内遊戯としては、品がよくて好い遊びである。木に竹を接いだやうな句が出来ても、面白いし、意味の無い頓珍漢なものが出来ても面白いし「天狗俳諧」には、朗かな笑ひ、爆笑、苦笑などが付き物で、冬期に於ける農村青年の娛樂としては、誠に誂へ向きのものである。問答も、近頃では犯罪捜査の上にも利用されて、犯人に不意に奇抜な問を發して、その反應を見て、犯行を推斷することが、行はれて居ると聞く。

八代將軍吉宗の時、本多唐之助と呼ぶ旗本が、疱瘡をわづらつて死んだ。唐之助は、その時未だ十六歳であつた。當主が十七歳以下で没すると、家督相續が出来ない掟になつてゐるから、老職達が心

配して、唐之助死去の趣を密に言上して、將軍の憐みに縋らうとした。

それを聞いた吉宗は、別に何の答へもせず「瘡瘡をわづらふと面體が變るものださうだな」とのみ云つた。「は、ッ。有難うござりまする」と老職たちは大喜びで、將軍の言葉を、本多家の家臣に通じた。所が、それを聞いた本多家の家臣は、吉宗が言葉の裏に隠して置いた慈悲の計らひを、汲み取ることが出来なかつたから、ありのまゝに唐之助が死去した旨を届け出たため、掟の通りに彼の家は斷絶して、僅に小祿を給はつて、名跡だけを残すやうな、みじめな結果を見てしまつた。つまりこれは問答の読みそこなひであつて、吉宗の言葉を、言下に諒解して御禮を言上した老職の頭を、唐之助の家臣が持ち合せて居たら、本多家は萬々歳であつたのだが、家臣が折角の吉宗の慈心を、讀み取ることが出来なかつたばかりに、家をつぶしてしまつたのである。

かうした大岡裁きに似た、一種の問答に關する挿話は、法の不備であつた封建時代には、夥しく語り傳へられて居るし、またさうしたことが、民衆を感服させ、感激させたのである。云はゞ問答式腹藝が、國を圓く治めて居たと云つても差支へが無い。それほど我が國には、問答式腹藝が多かつたのである。

## 政宗と山城守

直江山城守は、頗る頑固な男で家康の前でも一流の剛腹振りを示して、諸侯から敬遠されて居た。

或る時、獨眼龍の伊達政宗が、異國の錢を持つて來て、家康に見せた。東海に孤立してゐた當時の我國にあつては、異國の銅錢さへ珍らしがられたのである。

家康はそれを手に取上げて、頻りにひねくり廻してから、そこに居並んでゐる諸大名に、それを廻した。大名達は、異國の銅錢を、次から次へと廻した。いづれも、物珍らしさうに、と見かう見してから、また次の大名に廻した。

山城守の所へ順番が廻つて來た時に、彼は腰にさしてゐた扇子を半開きにして、その上へ異國錢を受取つた。それを見てゐた政宗は、下腹からむらむらと、怒氣が湧き上つて來るのを覺えた。政宗も頑固剛情にかけては、山城守に負けないほどの變人である。彼は、山城守に一喝を喰らはしたいと思つたけれど、家康の前ではあり、諸侯列座の中ではあり、混み上げて來る怒りの蟲を、じつと押へて

「あいや直江殿。お手に取らるゝとも苦しいござらぬ」

と云つた。ひろんその言葉の裏には、家康始め諸大名が、手に取つて見たものを、扇子で受けるなどは、面當てがましく、無禮千萬であらう、といふ意味が、充分に含まれて居た。伊達政宗の震え聲を聞いた諸大名は、一齊に山城守の方に注目した。

「何と申さるゝ？」

山城守は、眼を怒らして、政宗を睨み据ゑた。政宗は一つしか無い眼を睜つて、山城守を、はたと睨み返して居る。たゞならぬ氣が、殿中に満ちた。山城守は、扇子の上の異國錢を發止と投げ捨て、「予は、上杉景勝に代りて、數萬の軍兵を指揮して、手足の如く動かす者でござる。斯かる穢らはしき品を、何で手に觸れませうや」

「何と云はるゝ？」

政宗もきつとなつて、ひと膝乗り出した。この時家康は、山城守に向つて笑ひながら、軽くかう云つた。

「山城よ。其方は雪隠に入つて、如何様にして、大便を拭ひ取りまするな？」

「はッ。うーむ。それは……」

山城守は、ぐつと詰まつた。家康はなほも軽く、

「怒るなく。些細な事ぢやよ」

と云つて、また笑つた。家康のちよいとしたウキツトが、兩豪の衝突を救つたのである。これも問答のコツに依つて、功を納めた一例である。

また、機智の一言に依つて、人の命を救つた挿話もある。

福島正則が京で茶の會を催して、近衛應山公を招いた時のこと。應山公が、待合に来ると、今しも正則が客を迎へに出やうとする鼻の先に、蜘蛛の巣があつて、風に揺れてゐた。應山公の御同伴として、その席に居合せた滋野井冬晴朝臣は、それを見ると、さつと顔色を變へて、

「あゝ。あの蜘蛛の巣が、主人にかゝつたら、掃除人はきつと手討に遭ふだらう。取り除けてやりたいけれど、もうその暇が無い」とつぶやいた。

實際に於て、その昔は掃除人などは、塵芥のやうに考へられてゐた。何か大きな過失があれば直ぐ主人のために、ばつさりとやられたのである。殊に正則は氣短の武人であり、今日は晴れの茶の湯に

高貴な人を招いたのである。かういふ時に、主人に赤恥を搔かせるやうなことをしては、當然掃除人の命は無い。蜘蛛の巣は、光の加減で、肉眼に映らないことがある。掃除人はたぶん下にはばかり氣を取られて居て、頭の上に氣が付かなかつたのであらう。應山公と冬晴朝臣が、氣を揉んで居る所へ、正装をした正則が姿を現した。蜘蛛の巣は、果して彼の顔に引ッ掛かつた。

「う？」

正則は見る見る憤怒の相を現し、左右の手を自分の鼻の先で泳がせるやうに振つて、顔に掛かつた蜘蛛の巣を拂ひ退けた。この時應山公は、物靜かに聲を掛けて、

「正則殿。惜い事をしましたなあ。いま梢から一匹の蜘蛛が降りて来て、そこへ巣を掛け始めましたから、私たちは興あることに思ひ、巢が出来上つて行くのを慰みに眺めて居ましたのに、あなたが出て来て蜘蛛の巣を壊してしまひなすつたから、折角の樂しが、臺無しになりましたよ」

「は、ッ、それは思はぬ不調法をいたしました。何卒お許し下さいませ」

正則は町重に詫びた。彼の面にはもう殺氣は消えて、微笑が浮んでゐた。正則は固より應山公が機轉の一言で、下僕の命を助けたことを知らないでは無かつた。彼は、下僕に對する怒りよりも、應山

公のウキツトの方に、多く心を打たれたのである。

近頃官廳や會社などで新らしく人を採用する時に、大部分は一風變つたテストをして、志願者の人物を見るやうである。云はゞ一種の問答で、奇問を發して、若人をうるたへさせるやうなことを、やつてゐる。殊にウキツトに重きを置く、メンタルテストをやつて志願者を試みる。

靈元上皇が、或る時お戯れに、「面が歩く」といふ謎をお出しになつた。並居る殿上人は、誰も、これを解くことが出来ない。一同頭をひねつて居ると、やゝあつてから、西三條公福卿が、漸くこれを解いて「貫之」と解き候よと申し上げた。

すると上皇は「未だしく。木のつらゆきと申すべし」と仰せられて、お笑ひになつた。

清十郎聞け、夏が来てなくほとゝぎす

といふ句は、上皇の御作であると云はれて居る。

靈元上皇は民間卑賤の事にも通じ給ひ、

早稻、中手、晚稻かる田の一二三

といふ句も、上皇の御製であると云ひ傳へられてゐる。

明和八年の冬に出版された、諸國の盆踊唄を集めた「山家鳥蟲歌」上下二卷は、後水尾天皇が、寛文の年に諸國から徵せられたものだといふ傳説がある。後水尾天皇は、延寶八年八月寶壽八十五にて薨じ給うた。靈元天皇は、その皇子にあらせられ、後水尾帝が神去りました寶曆の年には、靈元帝が御位に即かせられてゐた。その時の將軍は、五代綱吉である。畏れ多い事ではあるが、後水尾靈元兩天皇は、御父子ともに、英俊にわたらせられ、深く下情に通じ給うた、みやびたる帝であらせられたと拜察される。

### 燦然たる地方唄

後水尾帝勅選と云はれる「山家鳥蟲歌」は、文政六年に柳亭種彦が「諸國盆踊唱歌」と題して、友人の藏書を筆寫したものである。その序文に、彼はかう書いてゐる。

「此さうしは、寛文の頃、後水尾院諸國に勅して、盆踊の唱歌を集め給ひしものなりとて、今より二十年ばかりさきに、友人の許よりかりえたりしが、其刻は何のこともなくて寫しとゞめず、其

のち見まくほりすれども、彼友人も亡せられたれば、更にせんすべなかりしが、今又はからず此寫本を得たり、御撰なりといふが、たゞいひ傳ふるのみにて、その虚實は不知、

いたこ出島云々の歌は、むかし見しさうしにはなし、後人の書き加へしものなるべし、そのはかも、なほ近くおもはるゝ歌あり、よく味ひて新古を分つべし、

文政巳酉の朔

柳亭種彦

文政六年から二十年前といふと文化の初年であつて、それでも寛文からは、既に百三十四年経過してゐる。とは云へ、文化の年は現代から見れば、云ふまでも無く、「山家鳥蟲歌」が世に、寛文に近い譯だが、その時にさへ、それが勅選であるかどうか、確實な據り所が無かつたのであるから、今日からすれば、なほさら漠然として、みだりに勅選説を唱へる事が出来ないのは勿論である。然しながらそれを傳説として傳へることは、美しいことであるから、強いて異説を立てることもあるまい。

「こなた思へばのもせも山もやぶもはやしもしらでゆく（山城）

「ひさごくづやにかやりをたきてあやゝにしきとゆふすゞみ（但馬）

「山がやけるにたゝぬかきじよこれがたゞりよかこをおいて（紀伊）

どのページにも、かうした絶唱で埋づめられてゐる。

坪内博士作の「新曲浦島」の中に使はれてゐる、「風がもの云やことづてしよもの風は諸國を吹き廻る」といふあの船唄は「山家鳥蟲歌」中の和泉の部に出て居る唄である。決して博士の創作ではない。かうした古風な素朴な中にも、藝術の匂ひ高きうたひ振りには、現代の人間が、如何に眞似やうとしても、眞似られるものではない。その意味から云つて「山家鳥蟲歌」は、鄙唄に於ける萬葉集であり、勅選歌集であると云つて、少しも差し支へがない。我々が、數百年の昔に、土の中から生れて來た、さうした寶玉の如く燦然として光り輝く、數多くの鄙唄を持つて居ることは、一つの大きい誇である。

これから筆者は、品川を旅立つて、神奈川から戸塚小田原などを経て、箱根を越え、吉田岡崎を過ぎて桑名に至り、海を渡つて鈴鹿峠の情調を探りつゝ、近江路から逢阪山を踏破して京の三條大橋に着く筈であるが、それらはなほ未完成であるから、こゝまでを一冊に纏めて、讀書子の座右に送ることとした。後篇は、いづれ機を見て上梓するつもりであるけれど、筆者が云はんとする主要なる點は殆んどこの一冊で盡きてゐる。即ち幕末から昭和へ掛けての流行唄、軍歌、唱歌などの變遷の跡。雜俳や文字遊戲の研究。それに伴ふ挿話の種々。それらは本書一卷の中に、十二分に説かれてゐる。

なほ、東海道筋の鄙唄の中、最も特色のあるのは、僧行基の作と云はれる「間の山節」が持つ、哀調の影響を受けてゐる、厭世的な伊勢路の民謡と、それから「投げ節」が持つ情趣を、今も傳へる京都附近の民謡である。前者は、ベスミスチックな我が國民性的一端を示してゐる點。後者は、風雅を愛する我等の傳統を示してゐる點で、共に珍重すべきである。次に、間の山節と「こちやえ節」の品川から京都までの歌詞を、全部掲げて、本篇の結びとする。

#### 間の山節

「ゆふべあしたの鐘の聲。寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人ぞなき。花は散りても、春は咲く。鳥は古巢へ歸れども、行きて歸らぬ死出の旅。野邊より彼方の友とは、金剛界の曼陀羅と、胎藏界の曼陀羅と、血脈一つに珠數一連。これが冥途の友ぞかし。

#### こちやえ節

「戀の品川女郎衆に、袖ひかれ、乗掛お馬の鈴ヶ森。こちや大森細工の松茸を。こちやえ〜。六郷渡りて川崎の萬年屋、鶴と龜とのよね饅頭。こちや神奈川急いで程ヶ谷へ。こちやえ〜。痴話で口舌は信濃坂戸塚前。藤澤寺の門前で、こちや止めし車は綱でひく。こちやえ〜。



「馬入渡りて平塚の女郎衆は、大磯小磯の客を引く。こちや小田原評議であつくなる。こちやえ〜。」

「登る箱根のお關所でちよとまくり、若衆のものでは受取らぬ。新造ぢやないかとちよと三島。こちやえ〜。」

「酒は沼津に腹鼓吉原で、富士の山川白酒を、こちや姐さん出しかけ蒲原へ。こちやえ〜。」

「愚痴を由比出す薩降坂馬鹿らしや、搦んだ口舌も興津川。こちや念じて戀名坂。こちやえ〜。」

「江尻まで来て氣は府中。それからは、泊りの宿もこ〜ときめ、こちや岡部で笑は〜笑はんせ。こちやえ〜。」

「藤枝娘の投げ島田しほらしや。大井川へと抱き締めて、こちやいやでもおうでも金谷せぬ。こちやえ〜。」

「小夜の中山夜泣石。日坂の名物蕨の餅を焼く。こちや敷して食はして掛川へ。こちやえ〜。」

「袋井通りて見附られ、濱松の木影で舞踏まくり上げ、こちや渡しに乗るのは新井宿、こちやえ〜。」

「御前と白須賀二川の、吉田屋の二階の隅で初小袖。こちや互にお顔を赤坂藤川へ。こちやえ〜。」

「岡崎女郎衆のちん池鯉鮒。よくお手の鳴海染きて宮の濱。こちや焼蛤ちやとちよと桑名。こちやえ〜。」

「四日市には石薬師願を掛け、庄野悪さを直さんと、こちや龜山薬師を伏し拜む。こちやえ〜。」

「互に手を取り急ぐ旅。こ〜る關坂の下から見上ぐれば、こちや土山つ〜じで日を暮らす。こちやえ〜。」

「水口びるに紅を付け玉揃ひ。どんな石部のお方でも、こちやたばに迷うてぐうにやぐにや。こちやえ〜。」

「お前と私は草津縁ばちやく〜と、夜の間に掲いた姥ヶ餅。こちや矢走大津で都入りこちやえ〜。」

昭和九年七月四日印刷  
昭和九年七月  
十二日



今昔流行俚物語  
定價壹圓五拾錢

著者 今西吉雄

發行者 與座正仁  
東京市牛込區改代町十八番地

印刷者 生方正男  
東京市小石川區原町十三番地

發行所 東京市小石川區原町十三番地  
振替口座東京三九五七二番  
東光書院

文學博士 小西重直先生校閱 高瀬越著

# 生命の教育

頁〇〇三 版六四  
錢十料送 錢十五圓一價定

一切の文化及社會生活個人の人格構成に關する根源の生命は其の内容に於て至誠眞實を有し發しては敬愛信となり以て具體的に一切の價値を創造し體驗し發展することになる。徒らなる概念の詰込みを避けて生命の内面より全人的に伸展せしめんと企畫したる著者の計畫は實に兒童と教育とに對する敬愛信の具體化である。教育思潮が形式的な認識論的研究に流れて動もすれば教育そのもの、本質を逸せんとするの恐ある時に當り本書を天下の教育界に薦めて以て教育者のために資せんとす。

東光書院編

# 漬物漬方辞典

四六判二八二頁函入上製 定價一圓五十錢  
送料 十四錢

漬物は通俗に香の物、お香々或は新香と稱し吾々日本人の副食物に缺くべからざるものである。一般に野菜類を鹽、味噌等に漬けたものだが、各人の食膳の向上と共に漬け方も變つてくる。本書は凡ての漬け方を研究記述したるもの。

古賀益城編

菊判六百頁函入上製 定價三圓  
送料 廿二錢

# 教育聖典と語録

篇、及附録篇に分ち一句一章再讀三省すべき金文字である。

二十數年間育英事業の爲致々として盡して來た著者の涙ぐましい修養と經驗の實録である。内容は教育精神篇、教育本質篇、教育思潮篇、教育實際篇、教師自警

IT3062

藤 廼 舍 鶴 峰 著

四六判六一七頁函入上製 定價二圓五十錢 送料二十錢

# 古今和歌評釋辭典

通さざるものなし、その内有意義なるものを採録評釋したるもの。

昔より和歌の十徳と云ひ、これを知らざると知らざるの損得は敢へて爰に贅言を要せず、本著者は和歌に關する造詣深く萬葉古今より大正昭和に至る歌集歌話中眼を

雨 宮 信 一 郎 著

四六判三百五十六頁函入上製 定價二圓廿錢 送料十四錢

# 事物起源事典

る所多大なり。社會文化研究家は勿論社交界の人々の必讀書。

本書は立派な日本文化史であり、又趣味の讀物でもある。知識の庫であると同時に談話の泉でもある。一讀よく吾等の言語史を知り再讀三讀して倦むを知らず得





